

社会人基礎力の測定に関する研究と 大学１年生の社会人基礎力の修得状況 —理学部，工学部，農学部，共同獣医学部の１年生によるデータ分析—

辻 多 聞

要旨

本研究は、社会人基礎力の測定方法の検討と大学１年生における修得状況の把握を目的として、山口大学の理学部，工学部，農学部，共同獣医学部を対象に調査を実施した。能力要素名と説明文に基づく「概略質問」と、具体的行動事例に基づく「事例質問」を用いて分析した結果、両質問間で回答傾向の相違が確認され、学部間においても一部の能力要素で分布特性の違いが示唆された。また、「働きかけ力」等の能力要素については、全学的な育成の必要性が示された。

キーワード

社会人基礎力，キャリア教育，大学１年生，自己評価，測定方法

１ はじめに

近年、大学教育においては、専門知識や技能の修得にとどまらず、卒業後の社会的・職業的自立に資する汎用的能力の育成が強く求められている。この点は、経済産業省による社会人基礎力の提唱（2006）において、「社会人基礎力を企業・若者・学校等をつなぐ『共通言語』として明確に位置付け、関係者の連携を強化することを通じて、長期的な観点から社会人基礎力を育成していく新たな社会的枠組みを形成する必要がある」と示されていることから明らかである。社会人基礎力は、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の３つの能力と、それらを構成する１２の能力要素から成る概念である。

社会人基礎力の提唱以降、大学教育においては、キャリア教育における有用な指標の一つとして広く活用されてきた。江口・小玉（2020）は、社会人基礎力に関する先行研究を整理し、正課教育に加えて、インターンシ

ップやボランティア活動、部活動などの正課外活動が社会人基礎力の向上に寄与していることを示す実践的知見を紹介している。

一方で、社会人基礎力をどのように測定するかという点については、依然として課題が残されている。経済産業省・特定非営利法人エティック（2013）は、インターンシップの振り返りを目的として、「インターンシップ・社会人基礎力自己点検シート」を公開しており、１２の能力要素について「優れている」から「劣る」までの５件法による自己評価を求めている。また清水（2018）では、各能力要素について１～５点で自己評価させる方法が用いられている。しかし、能力要素の概念的理解に基づく自己認識と、具体的な行動場面における自己認識とが必ずしも一致するとは限らない。この点を十分に検討しないまま測定結果を解釈することは、学生的能力を過大または過小に評価する可能性を内包している。

北島ら（2011）は、経済産業省（2008）にて示されたプログレスシートにおける各能力

要素に対応する 3 つの例文 36 項目を参考に独自の質問文を作成し、6 段階評価による測定を行っている。このように、社会人基礎力の測定に関しては、実施教員や担当者が独自に調査票を作成し、分析を行っているのが現状である。測定方法が十分に整理・共有されていないという問題点は、江口・小玉 (2020) に加え、尾田 (2022) においても指摘されている。

このような問題意識のもと、辻 (2025) は、社会人基礎力の測定において、能力要素名と説明文を提示する「概略質問」と、具体的な行動事例に基づく「事例質問」とを併用する測定方法を提示し、人文学部、経済学部、医学部保健学科の 1 年生を対象に分析を行った。その結果、「概略質問」と「事例質問」では回答傾向が異なること、また能力要素によっては学部間で分布の差異がみられることが示された。これらの知見は、社会人基礎力の測定において、質問形式の違いを考慮する必要性を示唆するものである。

しかしながら、辻 (2025) の分析対象は主として文系学部および医学部保健学科であり、理系学部に所属する学生の社会人基礎力の修得状況や、質問形式による回答傾向の違いについては、十分に検討されていない。大学全体として社会人基礎力の育成を検討するためには、全学的なデータに基づく検証が不可欠である。

そこで本研究では、社会人基礎力の測定方法の確立に資すること、および大学 1 年生における社会人基礎力の修得状況を把握することを目的として、山口大学の理学部、工学部、農学部、共同獣医学部に所属する 1 年生を対象に調査を実施した。具体的には、「概略質問」と「事例質問」の回答傾向の差異を検討するとともに、学部間における社会人基礎力の分布特性を明らかにし、さらに育成が求められる能力要素について考察を行う。これにより、社会人基礎力の測定および大学におけるキャ

リア教育の在り方について、実証的知見を提供することを目指す。

2 調査「社会人基礎力セルフチェック」

2.1 調査の実施方法

本調査は、山口大学共通教育後期授業科目「知の広場¹⁾～キャリアデザイン～」において、「【学生調査】社会人基礎力セルフチェックなど」という名称で実施した。対象者は当該授業科目の後期履修登録者全員であり、回答は「山口大学修学支援システム²⁾」の小テスト機能を用いて行った。

後期授業科目「知の広場～キャリアデザイン～」は、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部に所属する 1 年生を対象とした必修科目である。本授業は隔週実施のクォーター制で運営されており、奇数週履修生には 2024 年 10 月 2 日から 10 月 15 日まで、偶数週履修生には同年 10 月 9 日から 10 月 22 日までの 2 週間を、小テストの回答入力期間として設定した。

質問内容は、辻 (2025) で示した前期に実施した同調査と同一である。質問は大きく二つに分類される。一つは、社会人基礎力の各能力要素名およびその概略的説明文を提示し、それに基づく自己認識を問う質問（以下、「概略質問」）である。もう一つは、能力要素名を明示せず、具体的な行動事例に対する自己認識を問う質問（以下、「事例質問」）である。

「概略質問」は 12 問で構成され、「事例質問」は 12 の能力要素それぞれについて 2 問ずつ、計 24 問を設定した。したがって、質問数は合計 36 問である。なお、「事例質問」の文章は、起業家支援組織である株式会社ガイアックスが運営するウェブサイト「大学生向け GaiaXMedia」に掲載されている内容から抽出・引用した。各能力要素に対応する 2 問の「事例質問」については、以下、「事例質問①」、「事例質問②」と表記する。

各質問に対する回答は、「1. とても当てはまる」「2. やや当てはまる」「3. あまり当てはまらない」「4. 全く当てはまらない」の4件法とした。

本調査への回答およびその結果が、当該授業科目「知の広場～キャリアデザイン～」の成績評価に一切影響しないこと、回答は任意であり、個人が特定されない形で大学教育の改善を目的とした研究活動にのみ使用することを、「山口大学修学支援システム」の小テスト画面上の説明文、および授業内での口頭説明により周知した。

2.2 回答状況

表1は、2024年度後期授業科目「知の広場～キャリアデザイン～」における各学部履修登録者数と、【学生調査】社会人基礎力セルフチェックなどと称して実施した社会人基礎力の12の能力要素に関する自己認識調査の回答状況を示したものである。

本授業科目は必修科目であるため、履修登録者には再履修生（以下、高年次）が含まれている。しかし、本研究の目的は1年生における社会人基礎力の状況を把握することであるため、高年次の回答は分析対象から除外した。また、36問すべてに同一の選択肢を回答している者が認められたことから、これらについては回答の正確性に欠ける可能性を考慮し、無効回答として扱った。

その結果、有効回答数は、理学部163人、

表1 調査対象授業の学部別履修者数と社会人基礎力自己認識調査の回答状況

	登録者数 (人)	有効回答数 (人)	無効回答数 (人)	有効回答率 (%)
理学部	220	163	57	74.1
工学部	417	309	108	74.1
農学部	104	85	19	81.7
共同獣医学部	31	21	10	67.7
高年次 (59)	—	—	—	—
計	772※	578	194	74.9

※：登録者数合計値は高年次を除く

工学部309人、農学部104人、共同獣医学部21人であった。有効回答率はそれぞれ74.1%、74.1%、81.7%、67.7%であった。

3 「概略質問」と「事例質問」の相違

本章では、「概略質問」と「事例質問」における回答の差異について検討を行う。前述のとおり、各質問に対する回答は4件法で得られているため、「とても当てはまる」を4点、「やや当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点として得点化し、分析を行った。なお、次章以降の分析においても同様の得点換算を用いている。

表2は、2024年度後期に実施した調査結果に基づき、「概略質問」と「事例質問①」および「事例質問②」との回答結果の差異を示したものである。分析には、有効回答と判断した578件すべてのデータを用いた。比較にはWilcoxonの符号付順位和検定を用い、統計解析には「R 4.1.3」を使用した。なお、以下の解析においても同一の解析環境を用いている。

p値の表記については、0.10以上の場合を「n.s. (not significant)」とした。一般に有意水準として10%が用いられることは多くないが、一定の妥当性をもつ基準として用いられる場合もあることから、本研究ではp値が0.05以上0.10未満の場合を「n.s.-」と表記した。また、有意水準10%で有意な差が認められた項目、および有意な差が認められる可能性がある項目（n.s.-）については、表中で網掛け処理を施した。以降の表においても、同様の基準および表記方法を採用している。

表2に示すとおり、3項目を除き、「概略質問」と「事例質問」との間には有意な差が認められた。また、「働きかけ力」に関しては、「概略質問」と「事例質問①」との間で、有意な差が認められる可能性が示された。

辻 (2025) の結果と比較すると、「課題発見力」に関する「概略質問」と「事例質問②」、および「柔軟性」に関する「事例質問①」では、いずれも有意な差が検出されていない。これらの「事例質問」については、「概略質問」の結果と同様の傾向を示す可能性が考えられ、「事例質問」としての有効性が相対的に低い可能性が示唆される。ただし、本研究は単年度のデータに基づく分析であるため、今後さらにデータを蓄積した上で、「事例質問」としての妥当性について継続的に検討する必要がある。

以上の結果から、社会人基礎力の 12 の能力要素に関する自己認識を測定する際、「概略質問」と「事例質問」とでは、原則として異なる回答傾向が生じることが改めて確認された。このことは、「概略質問」のみに基づいて社会人基礎力の各能力要素を判断することには限界があり、具体的な行動場面を想定した「事例質問」への回答を併せて用いることによって、より適切な能力要素の把握が可能と

なることを示唆している。

4 社会人基礎力における学部間の相違

辻 (2025) に基づき、「概略質問」および「事例質問」の両回答結果を用いて、社会人基礎力の 12 の能力要素を評価した。各能力要素の評価値は、以下の算出式により求めた。

$$\begin{aligned} & \text{(社会人基礎力の能力要素の評価値)} \\ & = \text{「概略質問」} \times 2 + \text{「事例質問①」} + \text{「事例質問②」} \end{aligned}$$

上式に従うと、評価値の最小値は 4、最大値は 16 となり、13 段階の尺度で評価される。

表 3a は、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部における各能力要素の評価値について、平均値、標準偏差、中央値を示したものである。表 3b は、表 3a のデータに基づき、中央値に関する学部間の差異を Mann-Whitney の U 検定により検討した p 値を示している。

その結果、理学部、工学部、農学部、共同

表 2 2024 年度後期回答結果における「概略質問※¹」と「事例質問※²」との回答結果の相違

	概略質問			事例質問①			事例質問②			p 値※ ³	
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	事例質問①	事例質問②
主体性	2.94	0.69	3.00	2.74	0.78	3.00	2.78	0.79	3.00	<0.001	<0.001
働きかけ力	2.67	0.82	3.00	2.61	0.84	3.00	2.47	0.86	2.00	n. s. ⁻	<0.001
実行力	2.84	0.72	3.00	2.51	0.85	3.00	3.05	0.75	3.00	<0.001	<0.001
課題発見力	3.05	0.70	3.00	2.86	0.69	3.00	3.02	0.70	3.00	<0.001	n. s.
計画力	2.85	0.74	3.00	2.77	0.76	3.00	2.76	0.77	3.00	0.020	0.012
創造力	2.58	0.83	2.00	2.81	0.76	3.00	2.86	0.76	3.00	<0.001	<0.001
発信力	2.60	0.77	3.00	2.87	0.73	3.00	2.81	0.79	3.00	<0.001	<0.001
傾聴力	3.40	0.69	4.00	2.93	0.79	3.00	2.80	0.73	3.00	<0.001	<0.001
柔軟性	3.39	0.66	3.00	3.34	0.64	3.00	3.25	0.69	3.00	n. s.	<0.001
状況把握力	3.21	0.69	3.00	3.12	0.77	3.00	3.07	0.69	3.00	0.011	<0.001
規律性	3.51	0.63	4.00	3.16	0.69	3.00	3.33	0.70	3.00	<0.001	<0.001
ストレスコントロール	2.87	0.85	3.00	2.59	0.86	3.00	2.56	0.80	2.00	<0.001	<0.001

データ数：578 Wilcoxon の符号付順位和検定

n. s. : not significant ($p \geq 0.10$) n. s.⁻ : $0.05 \leq p < 0.10$

※1：社会人基礎力の能力要素を提示するとともにその内容に関する自己認識を問う質問

※2：社会人基礎力の能力要素は提示せずに具体的事例に対する自己認識を問う質問

※3：有意な差が認められた／認められる可能性がある箇所には網掛けをしている

獣医学部の間では、全体として大きな差異は認められなかった。ただし、「計画力」に関しては「理学部と農学部」間、および「農学部と共同獣医学部」間で有意な差が認められた。また、「発信力」に関しては「工学部と農学部」間で有意な差が認められた。加えて、7項目においてp値が0.05以上0.10未満となり、「n.s.」に該当する結果が確認された。表3bに示すとおり、とりわけ「計画力」においては、学部間の相違が生じる可能性が示唆された。

辻(2025)の結果では、「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」について「人文学部と経済学部」間、および「人文学部と医学部保健学科(以下、医学部)」間で有意な差が認められている。また、「傾聴力」については「人文学部と医学部」間で有意な差が示されている。本研究と辻(2025)とでは調査時期が異なるため、前期・後期データを直接比較した統計検定を行うことはできないものの、主として文系学部生が履修する前期と、理系学部生が履修する後期とでは、学部間の相違の現れ方に違いがある可能性が考えられる。この点に

ついては、今後さらにデータを蓄積し、継続的に検討していく必要がある。以上より、社会人基礎力の12の能力要素については、学部ごとに一定の分布特性が存在する可能性を前提として分析を進める必要があると考えられる。

5 育成すべき社会人基礎力

辻(2025)に基づき、「やや当てはまる」に相当する評価値12を基準として、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部において、育成が求められる社会人基礎力の能力要素について検討を行った。

表4から表7は、それぞれ理学部、工学部、農学部、共同獣医学部における社会人基礎力の各能力要素に関する評価値の記述統計量を示したものである。また、各能力要素について、「中央値は12より大きい」を帰無仮説とした場合のWilcoxonの符号付順位検定によるp値を併記している。なお、理学部、工学部、農学部については標本数が50以上であったため、正規近似に基づいてp値を算出

表3a 理学部、工学部、農学部、共同獣医学部における能力要素に関する評価値

	理学部			工学部			農学部			共同獣医学部		
	データ数：163			データ数：309			データ数：85			データ数：21		
	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	中央値
主体性	11.77	2.54	12.00	11.25	2.16	11.00	11.24	2.17	11.00	11.29	1.85	12.00
働きかけ力	10.42	3.05	10.00	10.45	2.58	10.00	10.41	2.74	10.00	10.00	2.47	9.00
実行力	11.50	2.35	12.00	11.19	2.24	11.00	11.00	2.13	11.00	11.29	1.79	12.00
課題発見力	12.23	2.12	12.00	11.87	2.07	12.00	11.84	2.08	12.00	12.19	1.81	12.00
計画力	11.45	2.53	12.00	11.20	2.28	11.00	10.69	2.12	11.00	12.29	2.33	12.00
創造力	10.81	2.79	11.00	10.87	2.44	11.00	10.91	2.47	11.00	10.05	2.16	9.00
発信力	10.82	2.64	11.00	11.01	2.22	11.00	10.39	2.17	11.00	10.95	1.88	11.00
傾聴力	12.37	2.26	12.00	12.62	2.13	13.00	12.49	2.12	12.00	12.67	1.88	12.00
柔軟性	13.18	2.19	13.00	13.34	1.92	14.00	13.73	1.87	14.00	13.71	1.93	15.00
状況把握力	12.36	2.31	12.00	12.66	2.18	12.00	12.79	2.07	13.00	13.00	2.14	13.00
規律性	13.41	2.09	14.00	13.45	2.09	14.00	13.72	1.80	14.00	14.05	1.88	15.00
ストレスコントロール	10.61	2.73	11.00	11.04	2.60	11.00	10.84	2.64	11.00	11.10	2.84	11.00

表 3b 理学部，工学部，農学部，共同獣医学部における中央値に関する差異

	p 値※					
	理工	理農	理共獣	工農	工共獣	農共獣
主体性	n. s. ⁻	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
働きかけ力	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
実行力	n. s.	n. s. ⁻	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
課題発見力	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
計画力	n. s.	0.015	n. s.	n. s. ⁻	n. s. ⁻	0.010
創造力	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s. ⁻	n. s.
発信力	n. s.	n. s.	n. s.	0.024	n. s.	n. s.
傾聴力	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
柔軟性	n. s.	n. s. ⁻	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
状況把握力	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
規律性	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.
ストレスコントロール力	n. s. ⁻	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

データ数は表 3a を参照

Mann-Whitney の U 検定

n. s. : not significant ($p \geq 0.10$)n. s. ⁻ : $0.05 \leq p < 0.10$

※：p 値における項目名「理工」，「理農」，「理共獣」，「工農」，「工共獣」，「農共獣」はそれぞれ「理学部と工学部」，「理学部と農学部」，「理学部と共同獣医学部」，「工学部と農学部」，「工学部と共同獣医学部」，「農学部と共同獣医学部」を比較対象としていることを意味する。また，有意な差が認められた／認められる可能性がある数値には網掛けをしている。

した。一方，共同獣医学部は標本数が 21 と比較的小さいことから，正規近似は用いず，正確確率に基づく p 値を算出した。

その結果，理学部，工学部，農学部，共同獣医学部のいずれにおいても，辻（2025）で示された人文学部，経済学部，医学部と同様に，評価値の中央値が，上記算出式における理論的中央値である 10 を下回る能力要素は認められなかった。個人差は存在するものの，学部という集団単位で捉えた場合，社会人基礎力に関する一定の基礎的水準は概ね確保されていると解釈できる。

表 4 から表 7 に示すとおり，4 学部すべてにおいて，基準値である 12 を上回った能力要素は，「課題発見力」，「傾聴力」，「柔軟性」，「状況把握力」，「規律性」の 5 項目であった。この傾向は，辻（2025）で示された人文学部，経済学部，医学部における結果とも一致している。すなわち，これら 5 つの能力要素については，現時点において，山口大学における大学教育全体として，社会人基礎力の育成を

表 4 理学部における社会人基礎力 12 能力要素評価値の記述統計量および Wilcoxon 符号付順位和検定結果

	平均値	標準偏差	中央値	p 値※
主体性	11.77	2.54	12.00	n. s.
働きかけ力	10.42	3.05	10.00	<0.001
実行力	11.50	2.35	12.00	0.007
課題発見力	12.23	2.12	12.00	n. s.
計画力	11.45	2.53	12.00	0.006
創造力	10.81	2.79	11.00	<0.001
発信力	10.82	2.64	11.00	<0.001
傾聴力	12.37	2.26	12.00	n. s.
柔軟性	13.18	2.19	13.00	n. s.
状況把握力	12.36	2.31	12.00	n. s.
規律性	13.41	2.09	14.00	n. s.
ストレスコントロール力	10.61	2.73	11.00	<0.001

データ数：163

Wilcoxon の符号付順位和検定

n. s. : not significant ($p \geq 0.10$)

※：帰無仮説：中央値は 12 より大きい
標本数が 50 以上であったため正規近似に基づいて p 値を算出した。また有意な差が認められた数値には網掛けをしている。

表 5 工学部における社会人基礎力 12 能力要素評価値の記述統計量および Wilcoxon 符号付順位和検定結果

	平均値	標準偏差	中央値	p 値※
主体性	11.25	2.16	11.00	<0.001
働きかけ力	10.45	2.58	10.00	<0.001
実行力	11.19	2.24	11.00	<0.001
課題発見力	11.87	2.07	12.00	n. s.
計画力	11.20	2.28	11.00	<0.001
創造力	10.87	2.44	11.00	<0.001
発信力	11.01	2.22	11.00	<0.001
傾聴力	12.62	2.13	13.00	n. s.
柔軟性	13.34	1.92	14.00	n. s.
状況把握力	12.66	2.18	12.00	n. s.
規律性	13.45	2.09	14.00	n. s.
ストレスコントロール力	11.04	2.60	11.00	<0.001

データ数：309 Wilcoxon の符号付順位和検定
n. s. : not significant ($p \geq 0.10$)

※： 帰無仮説：中央値は 12 より大きい
標本数が 50 以上であったため正規近似に
基づいて p 値を算出した。また有意な差が
認められた数値には網掛けをしている。

表 6 農学部における社会人基礎力 12 能力要素評価値の記述統計量および Wilcoxon 符号付順位和検定結果

	平均値	標準偏差	中央値	p 値※
主体性	11.24	2.17	11.00	0.001
働きかけ力	10.41	2.74	10.00	<0.001
実行力	11.00	2.13	11.00	<0.001
課題発見力	11.84	2.08	12.00	n. s.
計画力	10.69	2.12	11.00	<0.001
創造力	10.91	2.47	11.00	<0.001
発信力	10.39	2.17	11.00	<0.001
傾聴力	12.49	2.12	12.00	n. s.
柔軟性	13.73	1.87	14.00	n. s.
状況把握力	12.79	2.07	13.00	n. s.
規律性	13.72	1.80	14.00	n. s.
ストレスコントロール力	10.84	2.64	11.00	<0.001

データ数：85 Wilcoxon の符号付順位和検定
n. s. : not significant ($p \geq 0.10$)

※： 帰無仮説：中央値は 12 より大きい
標本数が 50 以上であったため正規近似に
基づいて p 値を算出した。また有意な差が
認められた数値には網掛けをしている。

表 7 共同獣医学部における社会人基礎力 12 能力要素評価値の記述統計量および Wilcoxon 符号付順位和検定結果

	平均値	標準偏差	中央値	p 値※
主体性	11.29	1.85	12.00	n. s. -
働きかけ力	10.00	2.47	9.00	<0.001
実行力	11.29	1.79	12.00	n. s. -
課題発見力	12.19	1.81	12.00	n. s.
計画力	12.29	2.33	12.00	n. s.
創造力	10.05	2.16	9.00	<0.001
発信力	10.95	1.88	11.00	0.010
傾聴力	12.67	1.88	12.00	n. s.
柔軟性	13.71	1.93	15.00	n. s.
状況把握力	13.00	2.14	13.00	n. s.
規律性	14.05	1.88	15.00	n. s.
ストレスコントロール力	11.10	2.84	11.00	n. s. -

データ数：21 Wilcoxon の符号付順位和検定
n. s. : not significant ($p \geq 0.10$)
n. s. - : $0.05 \leq p < 0.10$

※： 帰無仮説：中央値は 12 より大きい
標本数が 50 未満であったため正規近似は
用いず、正確確率に基づく p 値を算出し
た。また有意な差が認められた／認められ
る可能性がある数値には網掛けをしてい
る。

目的とする重点的な改善を要する領域ではない可能性が示唆される。

一方、上記 5 項目を除く 7 つの能力要素については、理学部における「主体性」および共同獣医学部における「計画力」を除き、いずれの学部においても基準値である 12 を下回る可能性が示された。

表 8 は、大学教育において育成の必要性が示唆される各学部の能力要素を整理したものである。表中の記号は、「●」を「育成の必要がある可能性が高い」、「△」を「育成の必要性について検討を要する可能性がある」、「-」を「現時点では育成の必要性が低い可能性がある」ことを示している。なお、人文学部、経済学部、医学部については、辻 (2025) の結果に基づいて整理した。

表 8 に示すとおり、「働きかけ力」および「創造力」については、すべての学部において「●」に該当しており、学部を超えて共通した課題となっていることが示唆される。ま

表 8 大学教育において育成の必要性が示唆される各学部的能力要素

	人文学部※	経済学部※	医学部※	理学部	工学部	農学部	共同獣医学部
主体性	●	—	—	—	●	●	△
働きかけ力	●	●	●	●	●	●	●
実行力	●	—	—	●	●	●	△
課題発見力	—	—	—	—	—	—	—
計画力	●	●	—	●	●	●	—
創造力	●	●	●	●	●	●	●
発信力	●	●	△	●	●	●	●
傾聴力	—	—	—	—	—	—	—
柔軟性	—	—	—	—	—	—	—
状況把握力	—	—	—	—	—	—	—
規律性	—	—	—	—	—	—	—
ストレスコントロール力	●	●	●	●	●	●	△

●：育成の必要がある可能性が高い

△：育成の必要性について検討を要する可能性がある

—：現時点では育成の必要性が低い可能性がある

※：人文学部，経済学部，医学部に関しては辻（2025）の結果に基づいて整理

た、「発信力」および「ストレスコントロール力」についても、いずれの学部においても「●」または「△」に該当しており、育成の必要性が相対的に高い能力要素であると考えられる。

以上の結果から、山口大学において社会人基礎力の育成を大学教育の目的の一つとして位置づけるのであれば、上記 4 つの能力要素については、全学的な観点から重点的に取り組むことが求められる可能性がある。また、表 8 を基礎資料として、各学部の専門教育の内容や教育方法との関連を踏まえつつ、能力要素ごとの育成方策を検討していくことが望ましい。

6 結論

本研究は、社会人基礎力の測定方法の確立に資すること、および大学 1 年生における社会人基礎力の修得状況を把握することを目的として実施したものである。辻（2025）では、人文学部、経済学部、医学部を対象として分析を行ったのに対し、本研究では、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部を対象として

調査および分析を行った。

その結果、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部のいずれにおいても、「概略質問」と「事例質問」とでは、原則として異なる回答傾向が生じることが改めて確認された。このことから、社会人基礎力を測定する際には、「概略質問」のみに依拠するのではなく、具体的な行動場面を想定した「事例質問」への回答を併せて用いることが必要であることが示唆された。

また、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部における社会人基礎力の 12 の能力要素の評価値については、全体として大きな差異は認められなかったものの、一部の能力要素においては学部間で有意な差異が認められた。さらに、辻（2025）の結果を踏まえると、社会人基礎力の能力要素には、学部ごとに一定の分布特性が存在する可能性を前提として分析を進める必要があると考えられる。

育成すべき社会人基礎力の観点からみると、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部の 4 学部において、「課題発見力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」の 5 項目に

については、基準値とした評価値 12 を上回る可能性が示唆された。この傾向は、辻 (2025) で示された人文学部、経済学部、医学部における結果とも一致している。したがって、これら 5 つの能力要素については、現時点において、社会人基礎力の育成を大学教育の目的の一つとする場合に、重点的な改善を要する領域ではない可能性が高いと考えられる。

一方で、「働きかけ力」、「創造力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」の 4 項目については、本研究で対象とした 4 学部に加え、辻 (2025) で示された人文学部、経済学部、医学部においても、基準値を下回る可能性が示されている。これらの能力要素は、学部を超えて共通する課題であると考えられ、全学的な観点から、体系的かつ継続的に育成に取り組むことが求められる。

(教育支援センター 准教授)

【注】

- 1) 知の広場：大学での学問、社会、地域のかかわり、グローバルマインドを育むことを通して、社会での働き方のほか、大学生活を有意義に過ごすための考え方と方法論を学ぶ。また、山口大学の学生が学内外の講師の職業・学問分野の概要を知ることにより、山口大学で学ぶ意義を理解し、山口大学の学生としての誇りと自覚を培う。低学年次向けキャリア教育科目。
- 2) 山口大学修学支援システム：山口大学では、学生が Web ブラウザを使用して、履修登録や成績確認等が行える『修学支援システム』を導入している。履修登録や成績確認の他に、シラバス閲覧、小テスト入力、休講・補講・講義連絡等のメッセージ確認もできる。

【参考文献】

- 江口圭一・小玉一樹, 2020, 「社会人基礎力に関する一考察」『福山平成大学経営学部紀要』16, 33-53.
- GaiaX (株式会社ガイアックス), 「社会人基礎力セルフチェック」, <https://gaiaxsite.wordpress.com/2016/08/17/社会人基礎力セルフチェック> (参照 2026/01/07).
- 経済産業省, 2006, 『社会人基礎力に関する研究会～「中間取りまとめ」～』.
- 経済産業省 (編著), 2008, 『今日から始める社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す!～』, 角川学芸出版.
- 経済産業省・特定非営利法人エティック, 2013, 『教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査報告書』.
- 北島洋子・細田泰子・星和美, 2011, 「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」『大阪府立大学看護学部紀要』17-1, 13-23.
- 尾田基, 2022, 「経済産業省『社会人基礎力』概念の批判的検討」『國學院大學教育開発推進機構紀要』13, 1-13.
- 清水陽子, 2018, 「栄養教育実習における事前・事後指導の在り方～社会人基礎力からみた指導効果と課題～」『函館短期大学紀要』46, 61-65.
- 辻多聞, 2025, 「社会人基礎力の測定方法に関する一提案と大学入学時の社会人基礎力の修得状況—人文学部、経済学部、医学部保健学科の新入生によるデータを基に—」『大学教育』22, 1-14.